

志水辰夫

夜の分水嶺



の
志水辰夫 分
水

徳間書店

嶺

夜の分水嶺

第一刷／一九九一年八月三一日

著者 志水辰夫 発行者 荒井 修 発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四一〇一 郵便番号一〇五―五五 電話〇三―三四三三―六二三―
振替東京四―四四三九二

印刷所 本文・(株)清水印刷所 カバー・近代美術(株) 製本所 大口製本印刷(株)
定価は帯・カバーに表示してあります。落丁・乱丁はお取替えいたします。

©Tatsuo Shimizu 1991 Printed in Japan. 編集担当 国田昌子

ISBN4-19-124625-9

夜の分水嶺

装画／野原幸夫
装丁／荒川じんぺい

十時を過ぎた頃から気温が下がってきた。

七、八度くらいにはなつていようか。薄い綿ジャンパー一枚の身には少々こたえた。青野淳一郎はまた煙草に火をつけた。掌の中の小さい火を暖かく感じた。

潜んでいる路地の頭上に、桜が枝を延ばしていた。花はようやく三分咲きというところ。春の甘い匂いがしている。

そういえば電車の通る音がしなくなった。長野電鉄の終電はもう終つたらしい。人通りはどうに絶えている。ときおり、思い出したように車が通る。

逆方向になる豊野方面から、スピードを殺した車がのろのろとやって来たのはその直後だった。ぞくぞくと戦慄が走った。勘である。やつはやっぱりやって来た。

心持ち路地の中へ身を引っ込めた。くわえていた煙草をからだの後に隠した。

ライトブルーの車が前を通り過ぎた。ふたり乗っていた。助手席に座っている女の影が一瞬見えた。

車は北信濃マンションの前をゆつくり通過した。ためらっている感じ。数十メートル行き過ぎると、明かりのない、塀の陰で止まった。

一文字に流れる大きな尾灯がしばらくついていた。エキゾーストパイプからガスをゆったり吐き出している。トヨタ・セルシオに間違いなかった。

ライトが消えた。

青野淳一郎は煙草を捨てて踏みつぶした。

まだ動こうとしない。そっと周囲をうかがっている。左右へ延びる一直線の道路が、果てで闇に溶け込んでいる県道。長野寄りに一軒、まだ営業しているラーメン屋の赤提灯が見えている。

ようやく男が下りてきた。

一目で蒲生徳郎だとわかった。年齢四十五。金融ブローカー。小肥りした背の低い男だった。腹が出ているせいか、ズボンの裾を引きずっているように見える。

北信濃マンションのほうへ引き返してきた。濃紺のダブルスーツを着ている。ワイシャツと、ネクタイ。銀縁の眼鏡をかけている。

一昨日、東京で行方をくらませたときと同じ服装だった。アタッシェケースを右手に持っている。

マンション玄関口の黄色い光。

誘蛾灯に惹かれる蛾さながら、蒲生がその中へ入って行った。

淳一郎は路地から半身をのり出し、五階の真中にある部屋へ目を向けた。灯がまだついていて、蒲生の義弟が住んでいる部屋だ。確かめたわけではないが、多分そこにも別の男たちが待っているはずだった。

夜露の匂いをたつぷり嗅いだ。痛みにも似た冷たさ。その気配を鼻孔から肺へ送り込みながら路地を出た。

真直ぐ車に向かった。

女が彼の足音に気づいた。

はっ、として振り返ったときは、もうドアを開けていた。

凝視するふたつの目が鋭く向かい合った。

「降りてくれ」穏やかに言った。

女がコンソールボックスの上へ身を投げ出すようにして彼を見上げた。「あの人は」

「五階へ行ったよ」淳一郎は運転席に潜り込んだ。「消えるなら今のうちだ。今ならきみも逃げられる」

「待ち伏せていたの。ねえ、淳さん。あの部屋で誰が待っているの？」からだをねじ曲げ、唇をゆがめて女が言った。

年が三十二。淳一郎と同じ年だと、何かのおり聞いた記憶がある。前歴がホステス。蒲生と組んで手形詐欺をやるようになってからは、初めて会う。気のせいか、顔がとげとげしくなっている。名は万里子といった。

長い髪をサイドへ流し、ウエーブパーマをかけていた。白く、透き通るような化粧。マスカラをつけ、指にはマニキュア。どんなときでも身だしなみを忘れない女だった。そういうことでしか、自分を主張できない女でもあった。

「誰がいるか、おれは知らんよ」

「電話して、確かめてから来たのよ。安全だと言うから頼って来たのに」

「そうしゃべれ、と強制する人間が電話の傍にいたらどうする」

「いったいあの人をどうするつもり」

「それはおれの知ったことじゃない。おれはただ、この車を取り戻せばいいんだ」

「どうせあの連中の差し金ね。いつもそう。うまい汁が吸えるときだけちやほやして、都合が悪くなると、途端に蜥蜴^{とかげ}のしっぽ切りよ。車まで取り上げるのはひど過ぎるわ」

「もともと会社名義の車なんだ。何かあったとき、会社の名が出たら困る人間がいるんだよ。車を取り上げられて困るのはきみたちふたりだけだが、会社の名が出て困る人間はもっと多い。要するにそれだけのことさ。悪いことは言わん。あの男と手を切るなら今のうちだ。それも、今、すぐのほうがいい」

「自分のことぐらい自分で決められるわ」

淳一郎は肩をすくめた。「キイをくれ」

「持って行ったわ。本当よ。わたしが逃げ出すんじゃないかと疑っているの。全財産を身につけて渡さないのよ」

淳一郎は軽い憐れみ^{あはれ}の色を浮かべて万里子を見やった。それから精彩のない、陰鬱^{いんぷつ}な顔に戻って車を下りた。

「荷物をまとめてくれよ」後のシートにある小型スーツケースを指さした。

「待ってよ。淳さん」万里子がさがるように言った。「お願い。わたしたちを助けて」

淳一郎は顔を起こした。そして無言で首を横に振った。

「あなた、そんな人じゃないわ。なぜこんなつまらない半端仕事なんかしてるの。こんな使い走りして、いったいいくらになるというのよ」

「誰だって何かして食わなきゃならない」

「昔の誇りはどうしたの」

「そんなもの、お互い、とうの昔に捨ててしまったんじゃないのか」
行こうとした。

「待つてよ」女が必死の面持で言った。

「ねえ。もう一度やり直してみない？ マニラへ行くのよ。持って帰れないお金が向うに置いてあるの。日本のメーカーが処分に困っていた有^{ゆうりん}燐洗剤を買^たい叩^{たた}いて、向うで売り払ったお金よ。当分遊んで暮らせるほどあるわ」

口許^{くちもと}がひくひく動いた。彼にうなずきかける機会を逃すまいとしている。自分がどんな岐路に立っているか、知り過ぎるほど知っていた。

「金がなくなったらどうする？」

万里子が目を閉じ、シートにからだがつたり沈んだ。

北信濃マンションに向かった。

玄関に足を踏み入れたとき、裏の駐車場から激しく争っている声が聞こえた。怒声^{どせい}と罵声^{ばせい}。つづいて短く、鋭い悲鳴。

車の急発進する音。

淳一郎はホールから裏口へ飛び出した。

照明灯が二本立っている。アスファルト敷きの細長い広場に二列になって並んでいる車。周囲が背の低いフェンス。向うに道路。さらに田園の闇。

車がその路上から走り去るところだった。黒ずんでいる車体を瞬間的に見たものの、ナンバー、車種を見分けるにはもう遅すぎた。

蒲生徳郎が通路でうつ伏せになって倒れていた。

脇に手を入れて引き起こそうとした。右手が生温い感触を探り当てた。刺されている。腹部を染めた血がアスファルトまで流れ出していた。

蒲生がかすかにうめいた。

目を開いていたが、もう見えているとは思えない。瞳孔が開きかけていた。わずかに唇が動き、咽が鳴った。顔をゆがめて、つづけざまに数回咳き込んだ。

仰向きにして、そっと下ろした。ポケットをまさぐり、懷中の物が奪われているのに気づいて、にわかに狼狽した。そういえばアタッシェケースが見えない。

しかし車のキイは見つけた。ズボンの後ポケットから小銭入れとともに出てきたのだ。

突然頭上で、女のわめき声が聞こえた。三階の窓ガラスに張りついている人影。

頭にカーラーを巻いている。着ているものはパジャマ。

淳一郎の視線にとらえられると、女はあわてて中へ引つ込んだ。

すぐ蒲生の傍を離れた。

間違えられたかもしれない。しかしここに留まって、身の証をたてる気にはなれなかった。彼の前歴を知ったときの警官の顔には、もううんざりしている。

表の道路へ戻った。万里子がこちらへ来ようとしていた。手に何も持っていない。淳一郎を見ると足を止めた。傲然と胸を張っている。傷ついていたが自尊心をまだ失っていないかった。

「救急車を呼んでやれ」淳一郎が言った。「間に合わんかもしれんが」

「どこなの」

「裏の駐車場だ」

彼らはすれ違った。振り返りもせず遠ざかる。もう会うこともないだろう。

セルシオに歩み寄った。

ドアを開けた。

リアシートに万里子のスプリングコートとスニーカーが残されていた。それを取りだして道路際の敷石の上へ置いた。

後のトランクを開けた。こちらには革製大型トランクが入っている。それも下ろして脇へ並べた。

乗り込むと助手席のドアをロックした。イグニッションキーを回す。V8、四リッター、二六〇馬力エンジンがリズムカルな脈動をはじめた。

セレクターをドライブレンジに入れ、車を路上に出した。

ルームミラーに、マンシヨンの前へ飛び出して来た人影が見えた。男があたりだ。見届けるように淳一郎の車を見送っている。

思わず舌打ちが出た。しかし、アクセルはゆるめない。

左折路がある。そこを曲がった。ようやく後方が見えなくなった。

肩の力を抜きながら、溜めていた息をふーっと吐き出した。

「冗談じゃないぜ」いまいましそうにつぶやいた。

いくらか広い道に出た。真直ぐ行けば国道十八号へ出るはずだ。あとは東京まで一本道だった。しかし、ものの三分と行かないうち、パトカーのサイレンが聞こえてきた。

ミラーに目を注いだ。まだ見えない。しかし音は近づいてくる。

停車している大型トラックの前面に行つて車を止めた。素早くバック。トラックの直前に着ける。ライトを消し、ハンドブレーキを引いて、シートに低く身を沈めた。

待つ間もなかった。

後方からやって来たパトカーがサイレンを鳴らしながら、全速で前へ走り抜けた。淳一郎は陰鬱な目でそれを見送った。遠ざかるパトカーの尾灯に目を据えながら、グローブボックスをまさぐった。

JAFのロードマップが出てきた。

ルームライトをつけ、右手に血が付いているのはじめて気づいた。

呪いの声をあげながら、ティッシュペーパーで拭^{ぬぐ}った。

地図を開いて数分見つめていた。

マップを置いてライトを消した。シートと左ドアミラーの角度を少し修正した。それからハンドブレーキを静かに下ろし、アクセルペダルに足をのせた。

セルシオという車に乗るのは初めてだった。外見は冴^さえないがいい車だ。力があり、静粛で、乗心地も悪くない。こういうつまらない仕事で乗ってなかったら、もっと楽しめたことだろう。

国道十八号を避け、須坂へと向かった。

須坂から菅平へ向かう国道に入り、途中から峰の高原原に向かう脇道へ外れた。スキーシーズンは終り、春の行楽にはまだ早すぎる季節とあつて、交通量はまったくなかった。もとより人家は一軒もないところだ。標高はそろそろ千メートルを越えているだろう。北斜面の残雪が増え、気温が一気に落ちてきた。

視界ははじめから利かなかった。行けども行けども深い森である。車内の時計が十二時二十分を指している。

この道に入つて十分になろうとしていた。その間対向車には一台も出会っていない。道が川筋から別れ、つづら折れの登りになった。広葉樹の森が杉の林と代わり、残雪の嵩^{かさ}が増してきた。

それは前触れもなく見えてきた。

オレンジ色の光だった。いま通り過ぎて来た下の谷に見えた。

それからぱつと森が明るくなった。黒煙が噴き上がっている。

火事だ、と気づいた。谷で何か燃えはじめたのだ。

車を止めた。ハンドブレーキを引き、外に下りた。

道路縁に立って下をのぞいた。木立ちが深くて炎は見えない。直線距離にして半キロぐらい、かなり下だ。

耳をすました。気のせいかな、ぱちぱちと火の粉のはじける音がする。しかしその割りに炎の大きな形跡はなかった。かといって、焚火の炎などではあり得ない。

淳一郎は苛立たしそうな目で火元を見やった。やや落ち着きを失っていた。気を静めるためか、ポケットからキャメルを抜き出して火をつけた。

その煙草を、吸い終るところまで我慢できなかった。途中で腹立たしそうに踏み潰し、肩を丸めて車に戻った。

手荒く車を発進させた。その先のコーナーを利用して車をユーターンさせた。

セレクトターレバーをセカンドレンジに切り換えて坂を下った。坂を下り切ってふたたび元の川縁へ出ると、火の手の上がっている位置がすでに後方へ退いていた。五十メートルばかり行きすぎている。注意して道路脇をうかがい、林の中に林道ともいえない細い道がついているのを見つけた。

エンジンを切って車を下りると、川の水音がしてきた。草だらけの残雪の中にタイヤ痕が残っている。

ためらっていた。

いやな予感というか、面倒事の中へ飛び込んでしまいそうな気がしている。

耳を傾けた。

流れの音にまじってときどき火のはぜる音。それもひとところに比べ、大分小さくなっている。進みはじめた。好奇心が勝ったというわけではなかった。何が燃えているか、見届けてから態度を決めても遅くないと思ったのである。

道はやや下り。岩魚釣りに来る連中が、むりに車を乗り入れて自然発生的にできた道のようなだ。

足音を殺していた。木立ち越しに伸びてくる炎の揺らめきが大きくなった。火炎が風を呼び込んでいるごーっという音が聞こえた。

黒煙が出ている。揮発性の物が燃えている火だ。

川原に出た。ごろ石が広がり、その幅が十メートルぐらい。水の流れはその三分の一もない。

足を止めた。三十メートル先に火元が見えた。

車だった。四ドアのセダンが燃えている。ノッチバック型だとはわからない。ほぼ燃え尽きようとしていた。

屋根がゆがみ、ガラスはほとんど崩れ落ちて原形を留めていない。火炎が車内で不完全燃焼を起こし、盛んに黒煙を吹き上げている。

もう少し近づこうとして、はっと息を呑んだ。

黒煙と炎の間から人形が見えた。

頭と顔の形がわかった。それはもう完全に炭化していた。それでも人間であることに変わりなかった。人間ごと車が燃えていたのである。

やはり来るべきではなかったのだ。

即座に引き返そうとした。

しかし遅かった。背後で鋭い声が出た。

「動くな！」

足音が近づいて来たかと思うと、ぐりつ、と固い物が背中に押し当てられた。

悲鳴をあげた。素人っぽい恐怖の動き、そのまま後を振り返ろうとした。

右腕が、男の手に触れた。

いまだ、とその腕を抱え込もうとした。

「あほう！」瞬間、男が怒声をあげた。狙いは見破られていたのだ。

後頭部にずんと強い衝撃がきた。鼻孔を、一種のきな臭い感覚が襲った。地面に膝を着くのがわかった。われながらぶざまだと思った。

そんなに長い時間ではなかった。引きずられているのが終始半分わかっていた。ただどうすることもできなかっただけである。はっきり正気を取り戻したときは、倒れたまま立木に縛られていた。杉の木を抱かされている。湿気を含んだ斜面の感触が不快だった。

頭がひびの入った鋳物みたいになっている。うなっている不協和音。殴られた後頭部に傷ができているにちがいない。開いた傷口が、はじめて空気というものに接して悲鳴をあげているのだ。

手首を確かめて驚いた。がっしりと食い込んでいる金属の環と鎖。その感触はまぎれもなく本物の手錠だったのだ。

男が向かいで懐中電灯を使っていた。淳一郎の持ち物を調べているところだ。運転免許証、現金、こけ脅しにもならない身分証明書、名刺。